児島虎次郎とエミール・クラウス

松岡　智子
倉敷芸術科学大学芸術学部

（1997年９月30日　受理）

１．はじめに

画家児島虎次郎（1881－1929）は大原美術館の基礎的コレクションを行ったことでは知られているが，彼の画業及び生涯が詳しく論じられることはなかった（註１）。筆者は，児島虎次郎の孫にあたる児島塊太郎氏の協力を得，児島虎次郎の研究を進めていくうちに，彼に宛てられたベルギーの画家たちの未公開書簡を発見した。本稿では，それらのなかから，児島と親交のあった画家エミール・クラウス（1849－1924）の書簡を紹介したい。併わせて，書簡の内容を理解する背景として，児島の「日記」から彼のベルギー時代の足跡をたどってみたい。これらは今まで明らかにされなかった1920年代の日本とベルギーの文化交流史における一側面に光をあてるものと思われる。なお，当時のベルギー画壇におけるクラウスの評価については，クラウス夫人が児島に説明した書簡６を参照されたい（註２）。

２．パリーゲント

児島虎次郎は，東京美術学校西洋画科を卒業後，明治40年（1907），東京府主催の勧業博覧会に，師黒田清輝の勧めで「情けの庭」と「里の水車」を出品し，前者は宮内省買い上げとなり，後者は１等賞を獲得した。それまで奨学生として児島を援助してきた実業家大原孫三郎は，学校を卒業したばかりの無名の青年が入選したことを喜び，児島に５年間のヨーロッパ留学を許したのである。

明治41年３月11日，26歳の時，児島はマルセイユに到着する。この時，彼が郷里の恩師に宛てた手紙には次のように書かれている。「多大の希望を荷うて目的地に安着致し候，戦場に血を流すも覚悟の上に御座候，充分奮闘可致候」（註３）。文面からは，異国に身ひとつで乗り込んでいく時の，児島の痛ましいほどの緊張感が伝わってくる。まもなくパリに落ち着き，出発前に黒田清輝から渡された紹介状をもって，ラファエル・コランを訪問する予定であったが，この年の「日記」にコランの名は見られない。しかし，パリの郊外グレーから岡山の友人の吉田苞に宛てた絵葉書には次のように記されている。「コラン先生の来る学校に一週間ほと通ふ。生徒は米人か多い。皆な拙い実に。少し出来る人は自分で勉強する，自分も一人でやる」（註４）。この頃の児島の「日記」には，当時のパリ画壇における新しい動向－フォーヴィスム，キュビスム，未来派などに関する記述はない。むしろ，東京美術学校時代とさほど変わり

なく，彼が崇拝したミレーの影響と思われる，落ち着いた色調の写実主義的画風を守り続けていた。パリの喧騒を離れ，郊外のグレーに1年間ほど滞在した後パリに戻るが，児島は，「日記」の明治42年2月17日から19日の欄で「とうして自分はこんなに弱いのか，とうしてこんなに自信かないのか，心かふらへして一定の信念かない。都か僕を馬鹿にしたのか，自分か都に馬鹿にされたのか。（中略）思へは此頃の都の生活か殆んと無意味である。少しも生活に緊張かない。あゝこの揺れる暮らしに自分を任せるなとは，とても忍ひない。（中略）今の所自耳義行か自分には一番よい方法てあろう（後略）」と反問している。

明治42年7月13日，児島は2か月程の滞在予定でブリュッセルから北西約50キロに位置するゲントを旅行し，すでに在住していた太田喜次郎を訪ねる。彼は前年に東京美術学校を卒業し，当時の画家としては異例であるが，ベルギーに留学し，日本人第1号としてゲント市美術学校に入学していた（註5）。児島の「日記」によれば，10月16日，彼は太田に誘われ，初めてこの学校を訪れ，校長ジャン・デルヴァンに会っている。以後，児島は毎日，午前中3時間のクラスに通い，10月25日からは2時間の夜のクラスへも通い始め，ついには学校を卒業する明治45年4月までの約2年半もの間，この町にとどまるのである。

太田喜二郎は明治41年3月末に日本からベルギーに到着し，翌月には早くもエミール・クラウスのアトリエを訪ね，指導を受けている。クラウスはベルギー印象派の最も代表的な画家として知られている。彼はアントワープの美術アカデミーで学び，社会性の強い写実的な画風による作品を描き，1882年にはパリのサロンにも出品し，以後，しばしばパリを訪れた。1890年代からフランス印象主義の影響を受けた風景画を手がけるようになり，「光の画家」と称された。ベルギー・アカデミーの会員となり，1888年以降，死ぬまでリス河岸の村アステネにとどまった（註6）。

児島の「日記」に初めてクラウスの名が登場するのは，明治43年4月16日からである。以後，大正元年（1912）11月に帰朝するまで，少なくとも6回，絵の批評を受けるために常に太田と一緒にクラウス宅を訪れている（註7）。クラウスのことは太田から聞いたに違いなく，児島は，初めて出会った日にクラウスから受けた批評を，当日とその翌日の「日記」に次のように書き記している。「すべての画家は各自身の個性を発揮して描くべきである。自分はフランドルの血を受け居る。〔自分は〕フランドルの画家として立つべきてある。君等は大和民族としてそれたけの代表的作物を描かねはならぬ。徒らに欧州に遊ひ，欧州の画風を模してはならぬ。固有なるものか発揮せられぬ作物は真て〔は〕ないと思う。固有とは，その人本然の意てある。深遠な画は作者の真心より出たものて無くてはならぬ。真似事て〔は〕行かぬ事てあろう。」このクラウスの指導は児島にとって生涯の指針となるべきものであり，実際，彼にとっての画業は「固有なるもの」への追求の連続であった。

3．ゲントーパリ

明治43年5月14日，児島は，太田とともに再びクラウスを訪れている。「日記」によれば

「目下の研究か以前のそれよりも有益なる由物語らる。室内と肖像の絵に面白き所ありと告けらる」と記している。児島は，この頃から「和服を着たベルギーの少女」（大原美術館所蔵）（図１）の制作を始めており，翌月の「日記」から，次のようにしばしば制作の様子が書かれるようになる。「午前，子供かちやんと九時に来る。よくポーズする。面白く始められるから面白く仕上たいものである。」（６月11日）。

図１　「和服を着たベルギーの少女」
明治44年作（大原美術館蔵）

７月５日の児島の「日記」によれば，パリから旅行でゲントを訪れた斎藤豊作が，この絵をパリのサロンに出品することを勧めている。同月９日，１か月程で完成させたこの作品の批評をクラウスに求めたところ，「此れは君か絶へす傍にお〔い〕て新らしい作品を描きたる度に比へて見たらよい。画家にも音楽家の要する様に，音叉なるものか必要である。此の絵を君の音叉として保存して置くべきものである」という評価を得ている。彼の言葉に自信を得た児島は，明治44年春のサロン・ソシエテ・ナショナルに，この作品を出品する。この年の２月21日，彼はこの絵を持ってパリに出，額縁を注文し，出品手続きを済ませている。そして，３月26日，サロン・ソシエテ・ナショナルから出品の通知を手にしている（註８）。郷里の兄徳太郎に宛てた絵葉書のなかで，入選の結果について児島は次のように述べている。「今年巴里の展覧会へ出品を試み申候処，先日出品許可の通知を得申候。小生これか初陣に御座候。この展覧会へ出品する事はなか〳〵の骨折仕事と御存し被下度候」（註９）。

「和服を着たベルギーの少女」のサロン・ソシエテ・ナショナル・デ・ボザールでの入選は，児島にとってパリ画壇進出の第１歩となった。この翌年，児島はデルヴァンから紹介状をもらい，このサロンの中心的存在であり，当時，フランス画壇の大御所だったエドモン・フランソワ・アマン=ジャンを訪れ批評を受ける。以後，彼は，日本の展覧会への出品にほとんど関心を示さなかった代わりに，帰国してからもこのサロンに作品を送り続け，入選を重ね，大正９年，日本人画家では最初の正会員に任命されるのである。こうした児島の活躍の背景には，アマン=ジャンの後押しがあったものと思われる（註10）。

さて，「和服を着たベルギーの少女」に用いられている技法には，この時期の児島の作品に共通する２つの特徴を見ることができる。１つは特に人物像の場合に顕著なのであるが，外光を逆光の状態で描いている点である。もう１つは，それまでの外光派からさらに進み，印象主義に見られる筆触分割の技法を用いている点である。絵の具をパレットの上で混ぜ合わせることを極力避けているために，色彩は鮮明さをいっそう増している。タッチはパリ，グレー時代より大胆で厚塗りであり，筆の代わりにパレット・ナイフを用い，さらにはチューブから直接

描くこともあった。以上の技法はクラウスが太田喜二郎に直接，指導したものであり（註11），児島もこれらの技法をクラウスから学んだ可能性は極めて高い。そして，光と色彩の研究を帰国後もしばらく続けた。

大正元年８月３日，クラウス宅を太田と訪問して以来，クラウスとの音信は途絶えており，児島の「日記」には大正８年１月18日に書簡を出すと書かれているのみである。彼がクラウスに久し振りに再会するのは，２度目の渡欧の時（大正８年６月－大正９年12月）で，大正９年４月13日，パリのグラン・パレにおいてである。そして，７月６日，ベルギーを旅行した時も，アステネで会っている。しかし，２人の関係がいっそう緊密になるのは，児島がベルギー絵画の蒐集を本格的に行うようになってからである。

４．児島虎次郎のベルギー絵画の蒐集とエミール・クラウス

児島の「日記」によれば，児島が美術品蒐集のためにベルギーを訪れたのは，３度目の渡欧の時（大正11年６月－大正12年３月）である。以下，児島の「日記」とクラウスの書簡から，ベルギーの絵画蒐集に際しての児島とクラウスとのかかわりを追ってみたい。

「日記」によると，児島が美術品蒐集のためベルギーを訪れたのは，大正11年７月21日から８月30日にかけてである。７月25日，児島はゲント郊外のクラウス宅を訪問している。書簡２はこの翌日発信されており，その内容から，クラウスは児島の依頼を受け，ベルギーの作家の作品を購入するため，ゲントのサロンを一緒に見学することを児島に提案したものと思われる。実際，７月29日，児島はクラウスにベルギーの現代作家10点を選択することを依頼しており，この日，彼はクラウスと共に美術館を回って作品を選んでいる。この年，児島は，蒐集のためにドイツ，スウェーデンを回った後，再度，ベルギーを訪れる。書簡３によれば，ドイツを旅行中，前もってドレスデンとベルリンから，児島がクラウス宅を訪問する旨の手紙を送っている。そして，９月28日，ゲントに到着し，クラウスを訪れている。その後，書簡４から，クラウスがフレデリック，レールマンス，ド・ブリュイエットの作品とデルヴァンの遺作を児島に勧めようとしていたことがわかる。大正12年１月29日から２月５日にかけて，児島は３度目のベルギー旅行を行う。１月30日，児島はゲントを訪れ，クラウスに会い彼の作品３点を購入している（註12）。この日の日付のクラウスの領収証によると，購入金額はそれぞれ5000フランであった。

その他，「日記」，書簡に記述はないが，大原美術館には児島が蒐集したクラウス作「２月」が所蔵されており，「竹内メモ」（註13）によれば5000フランで購入されている。

５．結　び

児島虎次郎の画風は，ベルギー・ゲントに移住して以降，それまでの暗い色調の写実主義的なものから明るい印象主義的な技法へと大きく変化していく。それは「光の画家」エミール・クラウスとの出会いが契機になったものと思われる。また，彼の指導を受けて完成させた「ベ

ルギーの和服の少女」はパリ画壇進出への第１歩となる。さらに，書簡・「日記」から児島がベルギー絵画を蒐集する際に，クラウスが中心となって児島を手伝っていたことが明らかとなった。以上のことから，画家，美術蒐集家，文化交流者として児島虎次郎を考察するうえで，エミール・クラウスは重要な存在であると言えよう。また，両者の関係は，1920年代における日本・ベルギーの交流史の新たな側面を示すと考えられる。

註

1　児島虎次郎についての著書は，彼の甥の児島直平著『児島虎次郎略伝』（同伝記編纂室，1967年）があるのみである。

2　児島とクラウス以外のベルギーの画家たちとの交流及び児島のベルギー絵画蒐集については，別稿で論じる予定である。

3　井上利喜次宛児島虎次郎書簡，明治41年３月11日付前掲書『児島虎次郎略伝』27頁に掲載。なお，原則として史料の引用は表記通りとし，例えば，濁点の有無や「あらふ」と「あろう」が併記している場合でも，原文のままとした。また，本稿で引用した史料には，筆者の判断で句読点を付し，引用史料中の〔　〕も，筆者が付したものである。

4　吉田苞宛児島虎次郎書簡，明治41年７月８日付。

5　黒田清輝「美術家には求め難い性格－太田喜二郎君の芸術」14，15頁（『美術』大正６年５月号）によれば，太田にベルギー留学を勧めたのは黒田であった。彼は自らの経験から，パリでは美術家の弟子にはなれても親しく付き合うのは難しいが，ベルギーでは友人のように懇意になって研究できること，また，パリの乾燥した下宿生活よりもベルギーで暖かみのある家庭生活を送った方がよいというアドバイスを与えていた。おそらく児島が留学に際して同様のアドバイスを受けたものと思われる。

6　太田とエミール・クラウスの関係については，中谷至宏「太田喜二郎とベルギー」（『ベルギー，光との出会い－児島虎次郎と太田喜二郎展』図録所収，成羽町美術館，1996年）を参照。

7　「日記」によれば，第１回渡欧時に児島がクラウスを訪ねたのは，明治43年４月16日，５月14日，５月28日，７月９日，明治45年２月23日，大正元年８月３日である。但し，明治44年の「日記」が紛失しているため，この年については不明である。

8　前掲書『児島虎次郎略伝』51，52頁。

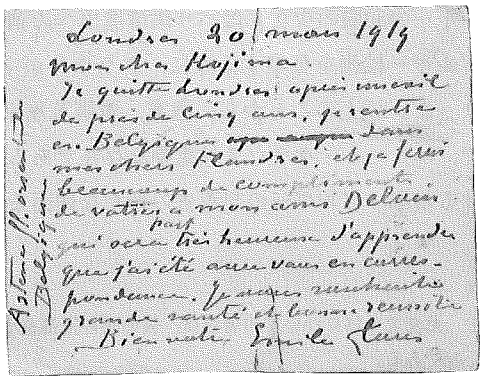
9　児島徳太郎宛児島虎次郎書簡，明治44年３月28日付。

10　児島とアマン=ジャンの関係については，拙稿「児島虎次郎とエドモン・フランソワ・アマン=ジャン－美術品蒐集活動を中心に－」（『近代画説』６号，1998年）を参照。

11　中谷至宏編「太田喜二郎日記抄録」92－94頁（前掲書『ベルギー，光との出会い』），また，太田喜二郎「児島君の絵に就いて」（「児島虎次郎特集」『中央美術』大正４年５月号）を参照。

12　この日の児島の「日記」の欄末には，フランス語で Le〔les〕Marronniers rouges, Soleil couchant (août), mon verger en hiver（「赤いマロニエ」「夕陽（８月）」「冬の果樹園」）と書かれており，これらはクラウスから購入した作品名である。

13　初代大原美術館館長・竹内潔真が昭和16年頃に作成した所蔵品目録（西洋絵画）。これには，作家名・作品品名・寸法・購入年月日・購入価格・評価額が記載されている。



児島虎次郎宛エミール・クラウス絵葉書(表)　児島虎次郎宛エミール・クラウス絵葉書(裏)
1919年３月20日付。

新発見史料－エミール・クラウス書簡

凡例

① 史料中の明白な脱字は〔　〕で補足した。

② フランス語の文法上の誤りは［sic］を付した。

③ 判読不能なアルファベットについては□で表記し，その単語を翻訳する場合には「……」で表記した。

④ 大文字や小文字，トレ・デュニオンの誤用については，煩雑となるためあえて指摘せず原文のままとした。

書簡１　Londres, 20 mars 1919

Mon cher Kojima,

Je quitte Londres après un exil de près de cinq ans, je rentre en Belgique, dans mes chers Frandres, et je ferai beaucoup de compliments de votre part à mon ami Delvin qui sera très heureux d'apprendre que j'ai été avec vous en correspondance.

Je vous souhaite grande santé et bonne réussite.

Bien vôtre, Emile Claus

1919年３月20日，ロンドン

親愛なる児島へ，

約５年間の亡命の後，ロンドンを去り，なつかしい私の故郷フランドル，ベルギーに戻ります。私は，友人デルヴァンへ，あなたがくれぐれもよろしくお伝え下さいとおっしゃっていたと言いましょう。彼は，私があなたと手紙のやりとりをしていることを知って，大変に喜ぶでしょう。あなたのご健康とご成功をお祈りいたします。

エミール・クラウス

書簡２　Astene, 26 Juillet 1922

Mon cher Kojima,

Avant de retourner à Paris, voulez-vous faire une visite avec moi au Salon de Gand, peut-être pourrons-nous trouver quelque chose d'un artiste-belge pour la collection de votre ami le japonais dont vous m'avez parlé lors de votre visite. L'avant-midi de 10 h à midi, je suis à votre disposition par exemple Samedi prochain 29 ou lundi 31 ou mardi 1 Août.

Je tiens à ce que, nous deux seuls, nous fassions cette promenade. Si cela vous arrange, envoyez-moi la veille un télégramme ; quel jour vous préférez : vous avezun train qui part de Bruxelles à 8. 25 et qui vous dépose à Gand St Pierre à 9. 29 .

Veuillez croire mon cher Kojima à meilleurs sentiments.

Emile Claus.

1922年７月26日，アステネ

親愛なる児島へ，

パリに戻る前に，私と一緒にゲントのサロンへ行きませんか？あなたがいらっしゃった時に私に話された日本人のあなたの友人のコレクションのために，たぶん，ベルギーの作家の作品を何点か見つけることができるでしょう。

例えば，来週の土曜日，29日か31日の月曜日，あるいは８月１日の火曜日の午前中，10時から12時まででしたら，あなたの予定に合わせることができます。

私はどうしても私達２人だけでこの散歩をしたいと思っています。もし都合がつきましたら，前日に電報でお知らせ下さい。８時25分にブリュッセルを出発し，ゲント，シント・ピーテルスに９時29分に到着する列車があります。

エミール・クラウス

書簡３　Astene, 20 Sept. 22

Mon cher Kojima, grand voyageur,

J'ai reçu votre carte de Dresde et je viens de recevoir votre lettre datée de Berlin, Et je suis heureux d'apprendre que vous comptez [sic] venir me voir. Je vous propose donc de venir partager notre dîner soit Jeudi ou Vendredi ; il y a un train qui s'arrête à Astene vers midi : c'est donc entendu que vous venez dîner à la fortune du pût [sic].

Poignée de mains de votre　Emile Claus.

1922年９月20日，アステネ

親愛なる大旅行家児島へ，

私はドレスデン発信のあなたの葉書とベルリン発信のあなたの手紙を受け取りました。そして，あなたが私に会いに来て下さる予定でいることを知り，うれしく思っています。木曜日か金曜日にお見えになり一緒に夕食をとりませんか？お昼頃にアステネに到着する列車があります。あり合わせの料理ですが，あなたに来ていただき夕食を召しあがることと心づもりをしております。

エミール・クラウス

書簡 4　Gand, 14 Déc. 1922

29 rue des Faulons

Mon cher Kojima,

J'ai été voir chez le peintre Frédéric qui m'a montré plusieurs choses, et naturellement dans lesquelles vous pourriez peut-être trouver votre choix ; aussi j'ai vu chez le peintre Verhaert des bons morceaux, en tout cas, si vous decidez de venir, je vous accompagnerai chez ces peintres : et si je sais quelques jours d'avance la date de votre arrivée, j'avertirai Frédéric, Verhaert, Laermans, De Bruyettes et quelques autres.

Peut-être qu'il serait préférable de venir en Belgique un peu plus tard, actuellement il fait tellement vite sombre. Par exemple, fin janvier ou commencement de Février, les jours s'allongent et on peut mieux voir, qu'en pensez vous ? Il faut arranger votre voyage pour la Belgique comme vous voulez. Je suis à votre disposition.

J'espère qui vous êtes toujours en bonne santé et croyez-moi votre dévoué,

Emile Claus.

P.S. Je suis allé voir la sœur du regretté ami Delvin et je constate que tous les beaux morceaux de peinture sont vendus, sauf deux ; 1° l'esquisse de sa belle toile qui est au Musée du Luxemburg, mesurant environ 1 mètre de long et 0.80 〔de〕 hauteur. 2° et une réplique du tableau du Musée du Luxemburg, réplique qu'il la peint avec un peu de variation q.q. mois avant sa mort, et qui est très beau . Voulez vous que je vous envoie le prix de ces deux morceaux. Je vous écris tout cela parce que je devine que plus tard vous n'aurez plus l'occasion de l'acquérir.

E.C.

1922年12月14日，ゲント

フォロン通り29番地

親愛なる児島へ，

私は画家フレデリックの所へ行き，数点の作品を見せてもらいました。あなたは当然，そのなかから何点かを選ぶことができるでしょう。また，私は画家ヴェルハールトの所ですばらし

い作品を見ました。いずれにせよ，もし，あなたが来ることを決めていらっしゃるなら，私はこれらの画家たちの所へあなたと一緒に行きます。そして，もし，あなたの到着する日が前もってわかりましたら，フレデリック，ヴェルハールト，レールマンス，ド・ブリュイエットなどに伝えます。

もう少し後にベルギーに来られる方がよいでしょう。今，こちらはまたたく間に暗くなってしまいます。例えば，１月の終りか２月の初めに都合をつけ，お会いできればその方が良いのではないのでしょうか，あなたはどう思われますか？ベルギーへの旅はあなたの希望どおりに手はずを整えなければなりません。あなたにお任せします。あなたのご健康をお祈りいたします。

追伸

私は今は亡き友人デルヴァンの姉〔妹か？〕に会いに行き，２点を除く彼の作品全てが売却されたことを確認しました。２点とは次の作品です。１．リュクサンブール美術館に所蔵されている傑作のエスキース（縦80cm×横１ｍ位）　２．リュクサンブール美術館に所蔵されている絵のレプリカであり，元のものを少し変え，彼の死の数か月前に描かれた作品で非常に美しいもの。

これらの２点の作品の価格をお知らせしましょう。私は全てのことをあなたに書いて送ります。何故なら今後，あなたはこれらを入手する機会はもはやないと思われるからです。

E.C.

書簡５　Astene, 12 mars 1923

Mon cher Kojima,

J'ai bien reçu votre lettre de Paris datée du 5 courant et je suis heureux que vous êtes [sic] content du choix que vous avez fait parmi les œuvres de mes artistes belges et je vous remercie infiniment d'avoir pensé à mon pays pour la collection de votre ami Magosaburo Ohara ; et vous savez que si j'ai le bonheur de vous revoir ici en Belgique, je suis toujours à votre disposition pour vous renseigner et aider si c'est nécessaire.

J'ai fait emballer en ma présence mes trois tableaux, celui de M. Delvin, et les dessins encadrés ainsi que les eaux-fortes de M. De Bruyettes, le tout dans un solide et maniable caisson : cette caisse a été envoyée à M.Van Ommesen, Comptoirs Maritimes Anverrais, Quai Jordaens 25 Anvers.

Ayant envoyé à M.Van Ommesen la somme de fr 462-95 frais d'expédition, je viens de recevoir tous les papiers.

Par le même courrier, j'ai envoyé au destinataire M. Magosaburo Ohara, Kurashiki Okayama, les papiers nécessaires avec lesquels M. Magosaburo doit réclamer la caisse.

Je vous envoie ci-joints les autres papiers.

votre bien dévoué, Emile Claus.

P.S. Bien des amitiés de ma part à Otta.

1923年３月12日，アステネ

親愛なる児島へ，

私は今月５日付のパリ発信のあなたの手紙を受取りました。私の仲間のベルギーの芸術家たちの作品のなかから，あなたが選ばれたものに，あなたが満足されていることに対し，私は嬉しく思います。あなたの友人大原孫三郎氏のコレクションのためにあなたが私の国のことを考えて下さり，私は大変に感謝しています。もし，私とあなたがベルギーで再会する幸運に恵まれるならば，必要とあれば，私はいつでもあなたに情報を提供しお手伝いをすることを御承知おき下さい。

私の目の前で３点の絵画を梱包させました。デルヴァン氏の絵とデッサンは，ド・ブリュイエット氏のエッチングのように額装しています。それら全てを，頑丈で持ち運びの出来る小さなケースに入れています。このケースをアントワープ，ヨルダーンス河岸25番地のアンヴェレ港支店のヴァン・オメセン氏へ送りました。

ヴァン・オメセン氏へは送料462フラン95サンチームを送金し，私は全ての書類を受け取ったところです。私は同じ便で岡山，倉敷の大原孫三郎氏宛に，彼がケースを受け取る際に必要な書類を送りました。他の添付書類を私はあなたに送ります。

エミール・クラウス

追伸　オタ氏［太田喜二郎］によろしくお伝え下さい。

書簡６　Astene, 29 Nov. 24

Cher Monsieur,

Je vous remercie pour votre bonne et sympathique lettre. Mon mari a disparu dans la plénitude de son talent, il a eu la mort qu'il désirait, sans maladie, sans décheance. Le coup a été cependant très cruel pour moi, la presse a été unanime pour célébrer le peintre de la lumière, cela est un grand réconfort pour moi.

Il y a déjà un Comité que Mme De Weert dirige pour ériger un monument Claus à Gand, à l'entrée du parc, en face du jardin Botanique. C'est Yvonne Serruys (Mme Pierre Mille de Paris) qui est chargée de l'exécution du monument. Elle avait été élève de mon mari avant de s'adonner à la sculpture. Elle espère pouvoir achever ce monument pour l'ouverture du Salon des B. A. de 1925 à Gand. Gand se propose de donner une ou deux salles pour faire une exposition rétrospective des œuvres de Claus.

Il y a encore un projet de monument, celui-ci sera érigé par quelques amis intimes de Claus avec mon concours. C'est-à-dire que je donnerai le terrain qui se trouve devant la maison du jardinier, juste à l'entrée de la grille de □ouneschyn. Le choix du sculpteur n'est pas encore fait, car ce projet n'est pas du tout aussi avancé que celui de Mme De Weert, il a fallu attendre que je puisse racheter la part des héritiers.

D'ici très peu de temps, j'irai passer l'hiver à Gand, mais à mon retour, je vais m'occuper de l'arrangement de l'atelier où j'espère grouper les œuvres les plus marquantes et j'espère qu'il sera digne de recevoir les visiteurs qui voudront bien venir voir les œuvres de mon mari. Je n'ai pas besoin de vous dire, que je serai toujours très heureuse de vous voir, cher Monsieur, et de pouvoir vous montrer toutes les différentes périodes du travail de Claus. Recevez, je vous prie, l'assurance de mes sentiments les meilleurs. C.Claus.

1924年11月29日，アステネ

親愛なる児島へ，

あなたから親切で心のこもった手紙をいただき感謝しております。私の夫は才能の絶頂期に亡くなりました。彼は病気も衰えもない，望んでいた死を迎えました。しかしながら，そのショックは私にとって大変に辛いものでした。新聞は一致して光の画家を賞賛し，そのことが私にとっては大きな慰めです。

ゲントの植物園の向かいの公園の入り口にクラウスの記念像を設置するために，ド・ヴェールト夫人が中心となった委員会がすでに発足しました。イヴォンヌ・セリュイス（パリのピエール・ミル夫人）が記念像の制作を引き受けます。彼女は彫刻に専念する前は夫の弟子でした。1925年のゲントのサロン・デ・ボザールの開会に向けて，彼女はこの記念像を完成させることを願っています。ゲント市はクラウスの回顧展のために１部屋か２部屋を提供することを計画しています。

記念像については，もう１つの計画があります。それはクラウスの親しい友人たちが中心になり，私も協力します。「……」の鉄柵のあるちょうど入り口の，庭師の家の前にある土地を，私は提供するつもりです。彫刻家はまだ決まっていません。というのは，この計画はド・ヴェールト夫人のものほど進んでいないからです。私は相続人の持ち分を買い戻せるようになるのを待たなければなりませんでした。

もう少しすると，私は冬を過ごしにゲントへ行きますが，戻ってアトリエの整理をします。そこで，私は最も重要な作品をまとめ，それらが，私の夫の作品を見に来ることを望んでいる訪問者を迎えるに値するものとなることを期待しています。あなたにお会いすることはいつも非常に喜ばしいことであり，クラウスの異なった時代全ての作品をお見せできることは言うまでもありません。

C．クラウス

Torajiro KOJIMA and Emile CLAUS

Tomoko MATSUOKA
College of the Arts
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712, Japan
(Received September 30, 1997)

Torajiro Kojima (1881–1929) is well known today as a founder of the Ohara Museum of Art, but his life and his paintings have been obscure. When I was studying them in collaboration with Kaitaro Kojima, grandson of Torajiro, I found a number of letters which were not opend to the public from belgian painters to Kojima. This time, I introduce 5 letters from Emile Claus who was known as a painter of belgian impressionism and one from his wife to Kojima. At the same time, I go on his track in the period in Belgium, making refernce to his dairy to understand a background of the contents of letters. According to the letters and the dairy, Claus taught Kojima Impressionism and helped his advance to the painting circles in Paris under Aman=Jean. It becomes also clear that Claus collected the belgian paintings with Kojima.